

## アナキストと自主管理

——『オートジェスチオン』誌の特集より——

冬川啓夫・訳編

訳者から読者へ

ここに紹介する三つの論文は、フランスの雑誌『自主管理』特集「アナキストと自主管理」（一九七二・一—四合併号から抜き出したものである。第一論文の署名は「トリビュヌ・アナルシス・コミュニスト」。訳名は仮のもの、TACで知られるグループである。第二、三論文の署名者については不明だが、第三論文が対象とするサンティリヤンはアルゼンチンの著名なアナキスト、スペイン革命ではFAIの闘士として活躍、カタロニア政府の経済相となった。著書には『スペインの革命の戦争』（一九三七）、『なぜわれわれは戦争に敗れたか。スペインの悲劇の歴史への一つの寄与』その他多く、主に革命の経済建設の問題を論じた。三論文にはひろく主張や力点にちがいがあり、不明確あるいは不十分と思われる点もあるが、どれも強い現実主義的指向に貫かれている意味で参考になるであろう。最も重要な論点で見解のちがいを生むのは、労働組合とコミューン、また評議会との関係をどう考えるかにあるように思われるが、この点十分に論じつくされ

ていないようである。

なお、引用の出典はすべて省略した。（冬川啓夫）

### I 自主管理革命の諸条件

フランスの一無政府共産主義グループ

1 自主管理は、完全無欠なものとして革命から生れはしない。それは、長期にわたる史的過程でしかあり得ない。

こうした考えから出発してこそわれわれは、しばしば行われている場合よりもより現実的に、またそれほどし意的にでなしに、過去および現在のさまざまな実例を判断することができる。またおそらく、われわれを待ち構える諸困難に立ち向かう準備をも、

一層よく整えることができるであらう。

今日、自主管理を語ることは新しい言葉に知的思弁を加え、あらゆる断片的見解をよせ集めて、一つの新社会システムを考え出すことではない。それは、一世紀以上にわたる労働運動の闘いの方針のなかに、とりわけ、パリ・コミューンの方針のなかに書き誌されており、マルクスも第一インターナショナル総務委員会でフランス内戦に関する講演のなかで、これについて「ついに見出された労働の経済的解放を実現せしめる政治形態」であると語ったのである。

だが、これをコミューン参加者たち自身に語らせるとしよう。

アントワール・アルノールは、その『コミューンの民衆および議会史』にこう書いている。

「ある人々にとってパリ・コミューンは、反政府原理の最初の実施、統一的集権専制国家という旧来の概念に対する戦いを表明し、具現するものであった。彼らにとってパリ・コミューンは、自由に連合した諸集団の自主性と、民衆による民衆の最も直接的な政治との勝利を意味した。彼らの見るところパリ・コミューンは、古い諸々の過誤を一掃すべき、政治・社会革命の第一段階であった。それは、独裁観念の絶対的否定であり、民衆自体の権力への到達であり、従って民衆の外部の民衆の上に立つ一切の権力の否認であった。」

「……パリは、コミューンの自治を宣言するに際して何を要求したか。パリは、フランスの国民的統一を破壊し、相互につながりのない小独立共和国同然の三万八千のコミューンを、フランスに打ち建てようとしたのか。確かにそうではない。そのようなのは、

君主制ヨーロッパを前にしてはただ愚かなことであり、狂気のこっけいな自殺行為であって、かつて何人も考えなかったことだ。パリ・コミューンは、自治と共に諸々の集団の連合を宣言したことを忘れてはならない。要するに、問題は、個人およびコミューンなり同業組合なりの現実的独立を確保すべき規定、公正にして正常な法規を最初に明確にし、類似する諸集団を互いに結合し、かくしてそれら集団が同時に、それぞれの発展と本来のあらゆる能力、生産的かつ進歩的なすべての能力の限らない拡大と、同じく個人の尊厳にとって本質的に重要な、力と自主性を生み出す団結を享受するようにすることである。」

ヴェルモレルは、一八七一年四月二四日の『民衆の友』紙にこう書いている。

「正義と科学に立脚する新しい計画に従って政治機構を再建するためには、古い政治機構をことごとく顛覆しなければならない。国家のために財産をただ没収することは、効価の疑わしい一時の方便であり、通常では唾棄すべき行為であるといわなくてはならない。なぜなら、それは必然的に国家の専制を再建し、かくしてコミューン解放によって専制を破壊しようとするわれわれの革命に、直接反するからである。」

確かにアナキストは、すべての社会主義者のなかで、直接管理の問題に最も熱中する人々である。しかし、資本主義社会のもつ抵抗手段と旧来の考え方を真実以下に評価したことは一つの弱点をなし、これはこれまで常に彼らを敗北に終らせ、確たる成果を収めることを妨げたのである。

他の社会への移行の問題は、いつも日程に上ってきた。一九六

八年五月も、これを示したばかりである。しかし今や、基本的な混乱の時代は過ぎ去り、労働者大衆が闘争を決定点にまで押し進めるのは、進展すべき社会に対する全体の考えに基づいて、資本主義社会の抑圧と不正とは廃絶することができると考え、しかもそのように信じる場合のみである。第一に、社会主義的国家主義の全体的失敗ということがあり、失敗は生産の領域（ここでも資本主義を乗り越えるというその主張はほとんど実現されていない）よりもむしろ人間関係の領域にあり、階層制を再生産し疎外を固定化している。

人間疎外解放の前進は、次の二つの基礎の結合の上でのみ企てられることができる。

一方では、資本主義の政治・経済体制を荒々しく廃止すること（「資本」は、いぜんとしてこの体制が搾取なしに機能しえず、従って一切の改良主義を非とするに十分な理論的根拠をなしている）。他方では、同時に自主管理制を建設すること。

これに次いで直く述べたいのは、狭義の自主管理、労働者による企業の管理が、革命開始のその日に資本主義の所有制と管理とにあって代わらなくてはならないということである。これこそは、基本的な革命行動である。企業における諸権限の漸進的獲得、労働者統制等々は政治的からくりでしかなく、それらを前以って訓練することは無駄とも見えよう。今世紀の革命運動すべてにおいて、共産主義体制に対する反乱の場合でさえ、労働者評議会の出現がみられた。ただそれらを出発点としてのみ、事は開始された開始され得るのである。

しかし、われわれが占めている地点すなわち多少の財産、装備、

自然資源、場合によっては金、貨幣、信用手段、経済発展の不同性等からすると、……豊かさの時代はまだ達せられないし、大部分の生産物が対外関係のことは別としても、いぜん商品の性格を保持するのである。

どのようにして社会全体がこの商品経済を統制し、その資本主義的性格を取り去り、芸術、保健、教育、公益事業に次ぐ数多くの経済セクターを可能な限り速にかつ漸進的に市場から救い出すか。

経験は、バクーニンの予見を確認し、社会のこのような根本的変革は社会的領域のすべて、とりわけ生産の領域に絶対的独占の地位を占める国家によっては、行われ得ないことを立証した。国家が、それを行うことは法律上の擬制はどうであろうと、そのとき事実上あらゆる生産手段の所有者となった国家装置が、労働力を搾取し、規則を定めてこれの階層組織に剰余価値を配分し得るようになるからである。

かくて商品経済に実際打ち勝つことができるのは、まさに革命から生起する政治的自主管理（自治）の体制である。

この体制は、固有の原理に従ってますます拡大し機能して、これまで社会のセメントとして役立ってきた国家的諸関係に代えて、社会の構成要素のすべて、生産単位や防衛単位、諸々の活動を営むあらゆる集団が、自主管理的諸関係によって現実に統合されるべきにのみ実現される真実の共同社会を打ち建ててであろう。

かくしてこの革命的組織は、最初の革命行動の直後から果たすべき役割をもち、しかも相当長期にわたってもち得るものと考えなくてはならない。

この役割とは明らかに——抽象的に考えたプロレタリアートの歴史的使命を成就するという口実の下での——権力奪取ではなく、まさに自主管理一般化のための闘いをすでに始めている地点から継続して、プロレタリアートの具体的前進を可能ならしめることであろう。

現在の、革命前期における革命組織の必要性については何を語るべきであろうか。

2——自主管理社会が勝利を収めるには、何故に革命的組織を必要と思うか。

アナキストの間で最も広まっているテーゼ、最初ヴォーリンが述べたテーゼは、大衆はまったく自然に生産と社会生活の諸手段を直接掌握することを目指すこと、一切の政治組織は民衆の渴望を自己の利益、およびそれが必然的に具現する国家の利益になるようにせよとすることである。このテーゼが意味するのは、アナキストはあらゆる形態の組織や組織の必要性を否定しないということである。しかし、民衆自身こそ管理機関の内部において自らを組織化しなければならぬし、このような機関が労働組合または評議会である。アナキストの集団であるべき本来の政治的組織についてはどうかというと、その任務は専ら教育と宣伝にある。とりわけ、スペインのアナルコ・サンディカリスト運動で公に説かれたのも同じテーゼであり、それは、政治的任務が労働組合という大衆組織によってもまた果たされねばならないと考えている。ベスナール（フランスのアナルコ・サンディカリスト、『労働組合と社会革命』の著者）は、一九三七年のアナキスト大

会で、労働組合は（経済）管理の任務を果たし、アナキスト集団はコミューンの運営を組織すべきであるとしたり。

一九六八年五月以後、コーン・ペンディット兄弟は、どのような種類の組織も必要でなく、大衆の自発性のみで十分だと考えている。運動を取戻し、しかも抑制し、あるいはサボラせたのは政治組織だといっているのである。

これらのテーゼとは反対にレーニンは、大衆の自発的運動は、イギリス流労働組合主義者の単なる部分的権利回復より先には進み得ないと評価する。運動を大衆自身は見出し得ない革命に導くものが、「前衛」と呼ばれる自覚的少数者である。この少数者たる人々は、いかなる場合にも資本主義体制内のどのような経済的利害にもつながりをもってはならないし、従って革命に全生活を献げる人々、すなわち職業的革命家でなければならぬという。

革命組織に関するあれこれの考えについて抽象的理論を述べるよりも、われわれの探究を上説の諸テーゼが生み出す否定的結果から始めるのが、より実証的であろう。

あとで述べる△前衛▽が存在したウクライナの経験はいま別として、ロシア（アナキストは多数派どころではなかった）でも、スペイン（アナキストがよりよく組織されていた）でも、六八年五月のフランスでも、直接管理への渴望が抑えられ、あるいはサボられたとするならば、それはまさにそのプログラムに、自主管理を説く前衛の政治運動によって規定された確たる政治路線が欠けていたためである。ただ一つ注目すべきはスペインについてであり、そこではFAIは△客観的▽前衛を形成してはいたが、種々の欠陥や異質分子を内部に含んでいたため、自己の路線を作り

あげ得なかつたのである。

それに反して、ウクライナのアナキストたちは「前衛」のバルチザンである。彼らは、政治的路線を有している。しかし、彼らは直接管理の敵対者たちにも全面的自由を許し、そうした人々によって壊滅せしめられたのである。スペインのアナキストたちも同じ過ちを犯し、権力を、しかも原理の純粹性という名で拒否して権力を掌握しなかつたため、ブルジョア政府の椅子で終りを告げることになつた。

この簡単な分析はもつと長々と押し進めることが必要であらうが、これだけでもわれわれに、自主管理社会を実現するには前衛が必要であること、また新しい構造をもち、国家であるべきではない政治権力を打ち建てる必要があることを考えさせるものがある。

アルジェリアの革命家たちもこの問題を提起し、「アルジュエ憲章」で不明確ながらこれに手をつけたが、解決を見出してはいない。しかも、事実上アルジェリア国家は自主管理を抑制し、それと戦つたがベン・ベラ政府はこれを支持した。敗北したのは、古典的な国家構造の遮壁を越え得ない政府である。

前衛のレーニンのテーゼでは、周知のように国家と党とが同一化されて労働者階級にとって代り、党機構が党にとって代っている。レーニンの前衛理論は、常に国家の展望の内部で適用され、結局国家は（民衆の）「直接権力」を窒息させ、それ以外の何もをももたらさなかつた。しかし、レーニンが『国家と革命』で、国家はパリ・コミューンの構造をもたねばならぬと確信した時、その理論が別の展望に位置づけられたものでないことを確認する

限り、問題にされているのは未完成の理論である。……われわれが関心をもつのは、レーニン主義の前衛理論が失敗であつたという事実である。

そこで、第三の方途を探さなくてはならない。これがわれわれの決意であり、多致共産主義闘士のそれでもある。

われわれは、この点について二通りの参考資料を有する。アルシノフが、ウクライナの運動から引き出した結論とその運動の失敗、およびレーニン主義の失敗から出発する前衛定式化の試みと採択された解決策、およびユーゴスラヴィア共産主義者の試みである。中国革命は、まだわれわれに新しい資料を現実にもたすことはできない。われわれが知るのはただ、文化大革命が実際に完了した以上、中国共産党は改組されるということである。

アルシノフにとって政治組織は、ロシアのアナキスト団体がなしたように、単に教育や宣伝に従事すべきではない。しかし、前衛はもはや政治的指導をこととすべきではなく、従つて大衆の政治権力にとって代るべきではない。前衛は「イデオロギー指導」に当るべきであり、これは直接管理を妨げるすべてに抗争し、その実現の諸条件を創出するものである。

ユーゴスラヴィアの共産主義者にとって党は、政治権力を放棄し、政治権力は大衆によって直接行使されるべきであり、党の任務は「イデオロギー指導」にある。しかし、これは明らかに理論上のことであつて、実際にはユーゴスラヴィア共産党はいつも眞実にこのように活動することはできない。共産党は、自主管理社会に適応した新しい社会構造を探究しているが、見出せないものである。それにしても党は、「自主管理」から加えられる攻撃と

サボタージュ（ナシヨナリズム、官僚制、経営）を前にしながらもその存続の緊要性を感じている。

もしわれわれとして六八年五月が、体制の危機と大衆のうっせきした渴望の最初の現われであると認めるなら、直接管理を志向する前衛が存在し、明確にして信頼し得る見通しを立て得ることが必要だったのである。

しかし、左派諸集団の失敗を確認するわれわれとしては、前衛を建設するにはそれを自称するのでは足りないことをよく知っている。

客観的に見るとき、フランスにおける前衛はいぜん共産党であるが、その綱領は大衆の直接権力への渴望に対応していないことを立証することが残っており、われわれはこれを立証しなければならぬ。このことは、われわれにとって明白であり、アナキストはいつの日にか必ずや勝利を収めるであろう己れの立場が十分な根拠をもつことを喜びとしているが、勝利を収めることは今、われわれの目標でも意図でもない。さし当りは、最も自覚した闘士から成る「主観的」前衛が存在することだけである。いかにして彼らを組織するかを知らなくてはならない。これには、なお共産党を棄てるべきだとは考えない人々をも含めて、革命家の大部分をいかにして集結するかをも知らなくてはならない。

要するに、共産党が大衆と結びついた「客観的」前衛の性格を失うことが必要である。なぜなら、経験は共産党がいまなお大衆を決定的に統制していることを示したからである。これが、今問題の核心である。

✽ ✽ ✽ ✽ ✽ ✽ ✽

## Ⅱ アナルコ・サンデイカリストの 自主管理観

ルネ・ベルティエ

この文章は、「サンデイカリスト同盟」（六八年五月のあとに建設された革命的サンデイカリストの組織）の一闘士によつて作成された。しかし、パリ地区だけに流布されたものであるため、同盟はこれに署名していない。

自主管理の理論を最初にかつ長期にわたつて発展させ、それを行動原理としたのは、ひとりリベルテール（アナキスト）たちであった。今日、この言葉はひどくけがされ、ほとんどの人々が用いるようになり、それを実施する現実が極めて異なるに依り、その本来の意義の多くを失ってしまっている。

「自主管理」とは、何よりも労働者の解放は労働者自身の仕事であるという原則を適用する手段である。このことは、この原則を適用し得る組織の構造が問題であることを意味する。これらの構造は本質上、まず事業の面と同時に居住の場所において、労働者すべての意志を表現することを可能ならしめる基礎的機構である。従つて、アナルコ・サンデイカリストによる自主管理の第一の特質は、すでに明らかである。すなわちそれは、社会（事業および地域）の経済的かつ政治的な基本的構造たることである。